# 阿古義物語

一

122
42

東京帝國大學圖書藏

流轉數回

# 阿古義物語

一名大磯人斬前帙

巻一

122
11
42

東京圖書館

| 和書門 | 小說類 | 二六函 | 三三架 | 六三號 | 一一冊 |
|---|---|---|---|---|---|

48/122

文化歳庚午春發市

式亭傳奇十種之一

# 阿古義物語

前帙四卷
分冊五本

趙子昂十勿

TOKIO LIBRARY FOUNDED BY NUMBUSHI

明治十年購求

## 阿漕物語序

余於丙寅春三月吾友式亭三馬
羅洲駹氏之怒而寓我柳齋數月
每夜挑燈登樓迄後寂寞無人
只聞時〻有呻吟之聲而已余
不知其何要者一時忽悟徐言曰
重手候足下之動止豈得意者

所編輯乎答曰諫然諫然即把
一叅之稿本欲與而如有所逡巡也
乎強奪之立刻披覽則題曰所謂
物語情思精絕固其分也何待稱
叅焉乎幸爲脩平之氏而生于東
海之濱二十三年于茲矣而栖栖
於產業而亡覓雲烟之過眼也



雖偶來暇隙而屬目二三之冊子
徒偷卷度絡耳數年碌碌殆如
沙礫也不及于彼肩販曲師之名
于一世也遠矣今臨足下有此盛拳
心寄有慚葉欲借叅端而一言述
吾意也不知許乎名式亦輒然笑
曰諾唯命是聽遂爲序乎時

文化三歳次丙寅夏六月中浣
柳齋野客灑毫于佐原之
小築

江戸 式亭三馬 醉書



流轉數回阿古義物語述意

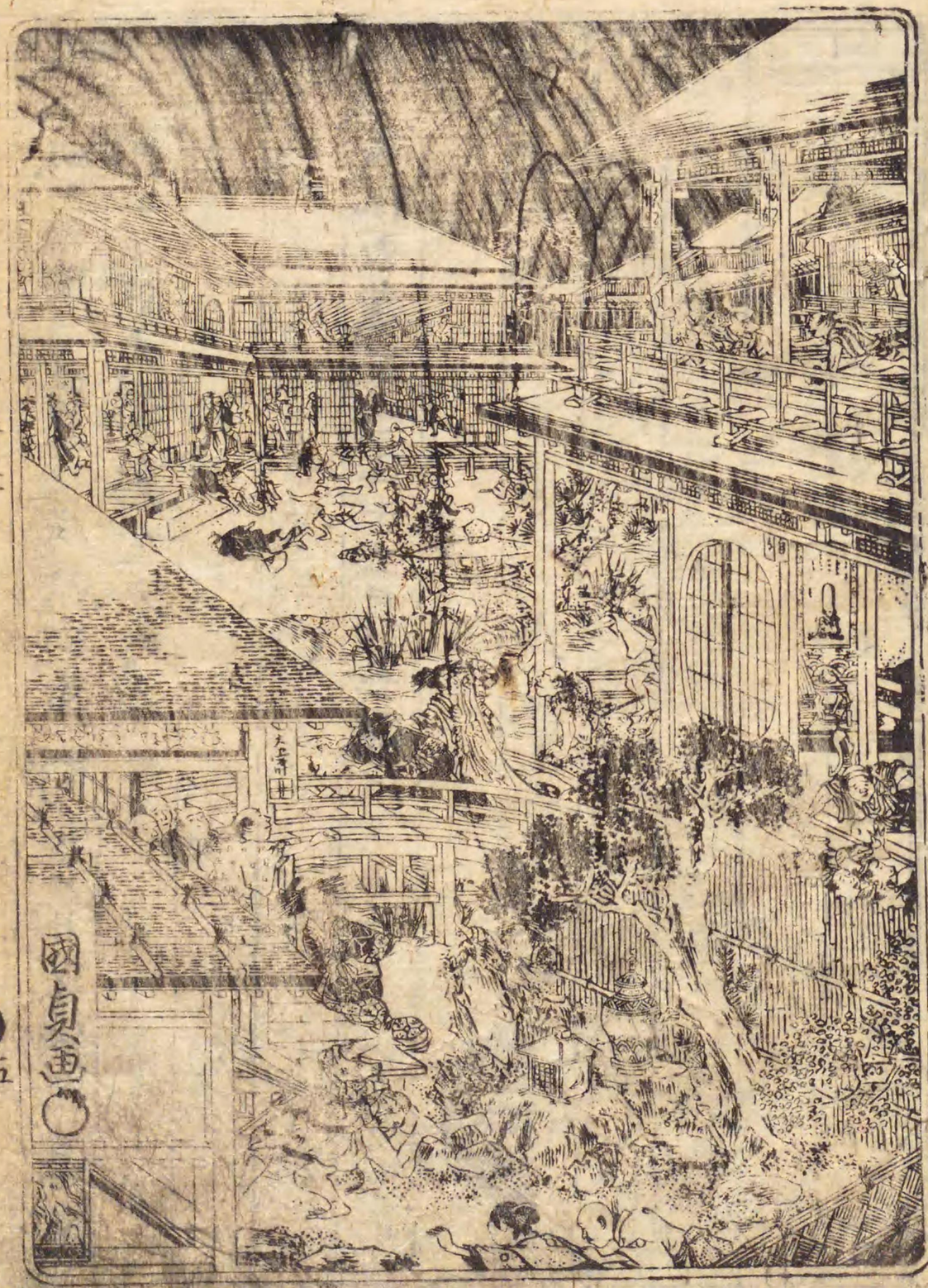
○這稗史ハ時代ヲ東鑑ニ拠ト雖素ヨリ作物語ナレバ露ハカリモ
寔説ニ非ズ。然レ𪜈忠孝義信。節操貞烈ノ縁故ヲ記シテ。勸
善ノ一端トシ。姦佞邪曲。嫉妬兇慝ノ戾蹟ヲ録シテ。懲惡ノ
一助トス。前因後果。究テ應報アル故ヲ示シテ。天羅地網。
遍ク漏サル理ヲ曉得サレム。
○文ニ和漢ノ雅俗ヲ混ジ。亜ニ古今ノ變態ヲ管サルハ。通來
小説ノ通例トイヘ𪜈。這稗史ハ雅俗ヲ混雜スル丁他ニ倍セリ。
試ニ其一二ヲ云バ。貴族ノ言ニ。父上母上你三等ヲ以ン。
野人ノ言ニ。■老爺老婆吾御今其方等ヲ以ス。■汝我■吾君
僕■和殿在下■和主吾們ノ屬ハ猛烈ナル丈夫ノ言ハ俗ニ從。

幼寵タル婦女ノ言ハ雅ニ從リ。是乃チ其人ト其樣トニ由テ。人情移リ易キヲ專トスル所以ナリ。仍テ文體定ラズ。毎張ニ變化アリ。這ハ是句欄ノ演劇。毎齣ニ脚色ト介科ノ華ルニ齊ク。開場ト第三回ト。趣向ノ宵壤タルニ從ノモノゾ。且婦女子ノ讀ニ僭ズ。傍人ノ聽ニ解易キヲ慮バナリ。是余ガ一家ノ口調ナレモ。句句備ラズ。字字諧リ。假ニモ文章ト云ベキモノニ非ズ。戯レニ之ヲ謂バ。戯房ノ哢ヲ顧ザル假做戯ロ技的ト云フ類ナルベシ。且一頭流布ノ小説ニ譬バ。首ハ繁英ノ如ク。胴ハ雨月西山ノ如ク。尾ハ文舍本ニ齊クレテ。鳴聲鷄ニ非ザレモ。讀聲傀儡院本ニ似タリケリ。

○虚ヲ以テ實ニ傳ルヿ。和漢小説家ノ本意トスレドモ。年代季月ヲ訂シ。子孫苗裔ヲ索リテ。史ヲ實録ニ擬スル屬。頗正史ヲ訪ゲ。俗耳ニ毒ヲ流スノ罪アリ。仍テ余ガ著作ノ小説ハ。強系譜ヲ拾ハズ。日時ヲ委セズ。又瑣細ノ事ヲ述ベズ。

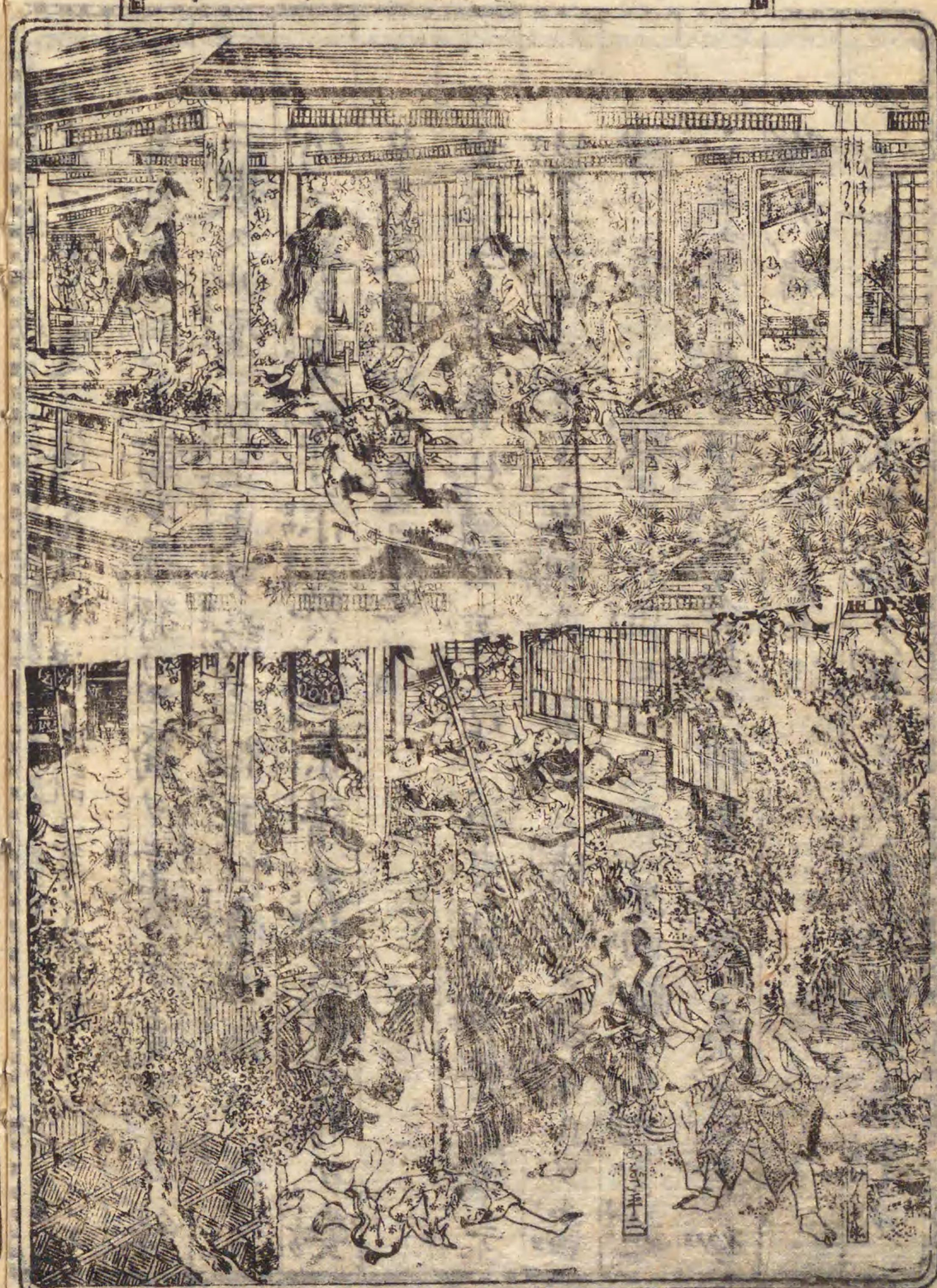
○文化三年ノ春。北總ニ遊ブ頃。這書開場ヨリ筆テ。第三回ニ至ル迄。稿成レガ。例ノ懶クテ放下ルヲ書肆ノ責ルヿ頻ナレバ。再ビ二之巻。第四齣ヨリ毫ヲ起シテ。竟ニ發市ニ及ブ。故ニ柳齋ガ序文ハ。這書初巻ヲ編ル頃ノ作ナリ。

○這書編述。末ダ稿ヲ畢ラズ。全部八巻。先半ヲ





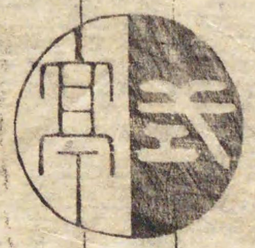

大磯乃廓楼十人斬の圖



列(サキ)テ世(ヨ)ニ廣(ヒロウ)ス。後帙(コウシ)四本。開市(カイシ)ノ日(ヒ)ヲ俟(マチ)テ高覽(カウラン)アラバ。余(ヨ)ガ幸甚(サイハヒハナハダシ)カラン。

文化六歳在巳巳十二月上浣

式亭三馬欽曰



舊本河漕草紙

全

あさきよりさ〳〵

たふき世(ヨ)ゝ見(ミ)ぬ色(イロ)〳〵にゆゝしきかゝり浦(ウラ)ふ
位(クラヒ)ある次第(ツギモリ)をゝ伊勢(イセ)ぶり氏(ヘイジ)なりゝるべしゝ弱(コヨ)ひふぐあて
いとゝあをとも見(アミ)ぬ網(クダ)をひいて今(イマ)はいくまでかゝりきるゝをこと
ばにてゝ御(モ)ぎ力ざなるまでかゝる伊賀(イガ)のはゝ山ふ志(ヒ)る人のいく
まゝゝ仕(ツカ)まつりて訳言(クヒヰオンダウ)半ふまみゝてあさきごはふさはようてのゆ

侍るくもつ〜ゐなりてあれば行〜所の翁ふ文りはふとを拔ぬはに
そるゆきてりるもをそぐまりてるそ
をそ弱そ新ふけ浦ふ人を神宮の贄とれそぎりいくちるつく人のよく
なりて所ふるをいつのくるう給留ぬ
りるそ不のもくぬせるう負光とてをそ
子地カ掃ヲ仕ぐをくらぬ
らなくるの浦ふ人を出て網あるる
料まであるそはるげりるれまれあ
るるけなるおるりの行ゆ仕てい
しそりもゆるそるのそ
しそ長さへあどをていくる
よりを神宮ふ出れば宮ふ





より出て宮の行きぐかりれをよの倒ふ拔とそ十の称宜
まりるそ次豊世あもきはるれぐむるよ下ぐ仁の国
一浦などふまるぎるもやるるそ神搭乃
そるぐふそいるるぐものを地そ宮国ふ公ふ出るるそ
安るるれけそ族ふ仕て贄ぐめせるやそ国ふ家百二十騎
おるるるせいの橋をきり要ぐ系より島門の潜にそもてあるぐるる贄の
あまをぐさはるげるる十の孫宜ぐるるぐ国目の〜ふ出るる
ゆ急ぎるるのて加種宮〜もあるる拔そはるもの拔るるて
軍よ及ぐるるかるふるるふぐむ次豊手ものそるれるるのるふ
宮家ふを国をはるるひ孫本あれぐるそほの出ふにまるもていき
なるるふ一ぐけふはるるるふ俄ふさるぐ

けれども法にせられや僧正おほせありてもてなしけるにはらず水にぬれぬさきに
浦(ウラ)みてあまたの明神(ミヤウジン)まゐりて讃(ミニエ)みちゆきてあはれぞかなしきことは
ありける時にそのころ三熊野の月守(ツキモリ)の山(エヤミ)にて瀧まうでしける人のうちにて後(ノチ)まう
けし源(?)僧の行誓(ギヤウチン)塚(ツカ)に僧(サラ)ぞこの世(ヨ)の弱もなりけれども猶(ナホ)様
さまざまなりければ今その友(トモ)をたより三にて平氏(ヘイジ)かなりける神(カミ)はまたぬさかけて
おもふにつれなく侍りし今(イマ)もおもひあはせてきこしなくいと白盛(サカモリ)
のいはれ八幡(ハチマン)をとこすずみなかりき建長年中乃造(ツクリ)への
棟札(ムナフダ)に平氏(ヘイジ)八幡山城(ハチマンヤマシロ)八幡社三安(ミヤスノ)もとより盛(モモリ)奉行(ブギヤウ)にせんける其(ソノ)木(ハチフタ)の札
に天王寺(テンワウジ)ありとかん何(ナニ)とては国のあさらにやさしむおもはんも
つぎみに海(ウミ)あまた浦(ウラ)に引(ヒ)く網(アミ)の歌(ウタ)いまよりおもふにまかせぬ
なりけりこそ下二(トニ)の翁(オキナ)山内(ヤマウチ)の猪(イヤツ)がまへにかまくさくさり

かくて京(ミヤコ)にかへりぬまでまちて右府(ウフ)の御出(ニミ)にあはぬ
伊勢(イセ)の海(ウミ)あまの網(アミ)になりとなりぬべきや
あくまで後(ノチ)は蓮(ハス)のうへにあそ
南無阿弥陀仏

明應二年十一月三日　兵部少輔修宗

借筆於師之本写之
於新宅中京師（花押）

右一冊借出中井某本而写之畢爰友賢公需畢
丙午孟春上浣　源政仲

舊本あるべきはずし予が藏する所の多田義俊自筆本とあてらるべきか

（田五部名は義俊一に南嶺子又秋齋と号して国学と畫井義知鶴翁を学て賀茂の本をくすぶのきゝえ高し浪華の人なり）

原本七行こゝく僅に七張あり案ずるに此草紙拙あるに似たれども他の草紙物語にてらべれば簡略なるものゝごとし

あるべき浦ふく細の歌とゝ加へ又所の翁ふ聽書とゝつたゞし批判とのゞく業にしくもとゞてまゝ〳〵次且次盛が刑に行ふしる季月もとゝと又右京進盛光ハ伊勢家の祖なる津の右馬允盛信が弟之次盛とゝつの系圖ふとゝと安元治承の頃ゆゝとれ六帖ふ咏ひく鯛の歌ハ世も遠ふ二百余年の後ゝ彼此思ひ合ゝふ真偽疑ハきりのなり後人宜考案あれべし

筋從盤外交
針向嘴邊穿
逢客誰施禮
斜頭只聽膏

阿漕平次一子平作
聲目ゝ營生ふ
讃語と読
説經節を
語れ

坐頭坊
布留都

國貞画

日本書紀
萬葉集
大系圖
古今六帖
勢陽雜記
宮川日記
羽津考
參詣記
名寄ふ枕
西伊陸筆
その他
書を
あらゆる
とゝふ
掲出ゝ

専用佳紙精工
刷印不破不落

## ○勢州阿漕浦支蹟竝地名考證

阿漕浦ハ伊勢国鈴鹿郡の海濱なり。今ハ津の城下なる岩田橋より巽ゝあれど。こゝよつまびらゝ古所詳なるべし。坂士佛が參詣記ゝ云○安濃津を出て。あこぎが浦を過ひくゝ。鹽屋の細心ゝ。うハのそゝに旅ゝ。往昔ハ此あり。ゝ足ゝ。

て。ゝ。ゝ。べし。凡て両宮の祭禮ゝ千鯛をゝて御饌とせり。是を御幣鯛。ゝ。ゆゝげ鯛。又誤ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。毎年の例ゝて尾張國智多郡。篠島の神主より奉ゝ。これを神供として。其余ハ正員の徒。三祭の翌日。宿館ゝて拜味ゝ。其魚を採る時ハ。長官より幕二張ゝ船ふ張て。一日ふ採置

一説ニ鯛ハ太比ヨリ
ひくたひの
たびうこと
ハ三ヶ月
のたひとり
くたひき
ゆくたびと四
月に折ヒ
ろ者の
ことなり

ことなん。或説ニ。いまゝへハこれを阿漕浦ゆて釣ゝと以て。鯛ハ八十八夜の頃ハ
いくれば。所くの海ハ浮あがれ。是を九州ゆてハ浮鯛といふ。されども海中普く
浮く物ハあらず。國中一二ヶ所ニ限りて會ハ。此両宮近き海も多くといへども
阿漕浦をもて鯛の會れ所とす。年を経て其所を更るゝあり。故ハ往古ハ此
浦ゆて他猟を禁めしといふ。されど密ハ漁とる者のありて。度重れば竟ハ
あらはれ。罪せらるゝ事ども。間其ためしもあれよしを以て。古今六帖ハ鯛の題ハ。

古今六帖ハ阿漕の嶋ゆひく鯛のたびうさなくゝ人ありねべこ。○此の歌

按ずるハ。阿漕ハ地名ゆてもし。其歌を翻して。
を一島にくゝ。ありゝとのゝ。

伊勢の海阿漕が浦ハ引く網のたびうさなれがあらはれハ。

世俗ハ誤を傳へゝなり。阿漕の文字ハ○阿古義○安古木等ゝ。按ずる
ハ濃ノ字ハ濃と訓く。安濃浦を安濃
といふを。いつとなく津とのこいひなゝ。ふるゆゝ。さくと津といふ。
寄昔船著海濱の水門ゆてあるしゆゑなり。むし伊勢津彦の供奉の神ハ。
饒雄彦といふ。此神を領せゝ年を歴て。垣武天皇十代の後裔
出羽守平正衡の三男。安濃津之郎平貞衡より。平氏數代の住居なり。
是を伊勢平氏といふ。

又東鑑ニ。三日平氏の名あり。○此後明應三年五月七日。同七年六月十日。
両度の大地震ハ安濃津十八九町沈没せるゝより。今の地へ移され。○
其後文禄年間。今の安濃津へ。細野九郎左衛門尉藤敦城を築きて

住り。天正十一年より織田上總介信包。城主となりて。堀石垣等を結構
そ。又天正十八年より富田家城主となれ。もしてのち慶長の頃に至りて。
城下廣大になれりと云云。

○安濃津　○安濃の松原　○安濃ヶ湊田　○安濃の河原　○安濃の板橋
○安濃の塩木　○安濃の海子

安濃等をれりひめいをれり。安濃をアコキと訓アーと。後ふいりて木をも義と
濁しのなるべし。一說ゆとこの海子の支あてきこの木をもべしといり。されい
塩木とこゝに積るる事は多きふりてあこぎ。海子木といひるるゆや○あこの
證歌は萬葉集三の卷に。大宮の内まできとゆめびきとこのあとのあ
のようびたる云云○塩木は此浦は古歌に。新後拾遺集に崇全法師のよる。
つきそれなよ度を重ねく塩木けむ。あこぎが浦ふなれ月け。

野史に伊勢平氏と伊勢武者の相違あり。伊勢平氏は伊勢武者とは異なり平氏繁榮の頃伊勢国の武士黨なりしも忠清は市の

按察使公敏の歌に。いふせんあこぎが浦に袖ぬれて。ぬるや塩木のかぐ
ろ。此説據あれども。遠くはき字清濁の誤なべし。
○阿漕の平次といふは名にあるべし。前にも演るごとく平家は本國を阿濃
郡なれば平氏を平次と誤りて。伊勢平氏を阿濃平次と呼びまゐりのも。
○安濃津の支因は。前亞相親房卿の撰なる洞津考といふる書を此
津の物語なるべし。洞津といふ。この文は其略意をもるを○この
津の名のとより旧りそれば。格式の文ふもあり。代々は和歌ふも多かりき。
伊勢守速蔭が記あり。洞津と出り。其書やうとりけんかゝ國の人の渡れる時
ふ伊勢ふ洞津ありきやと尋ねしぞ。安濃の社れとりに安塚とて侍り。是わ
國の図帳して民の司よりたゝせしふも。傍示の塚とのを出載ね。今遂するふ
其形ぞうもなし。平家の忘し此國ふひそうる時。八幡の宮とて祝ひる

一伊勢武者ハみな緋おどしの鎧きて宇治の網代にかかりけるかな 是乃ち伊勢武者の証 源平盛衰記にみゆる

も絶て今安濃の傍今にて田となりたる中に木のしげりたる所ハ華表にてあるべし又左衛門塚とて礎の侍るなりの社の跡なりとぞ。安濃の傍今ハ塔世の東川岸に在楠の林にぞ侍き。其左にあるも氏社。おき森の氏社ならん玆にも今ハ松の濱風の音さへ絶ぬ此二社ハ安濃の社宮なり。かくおもひあはするになほ宮にあらんかし云云。

○或人の云。洞を穴と訓む例のあれバ洞津の訓ハ○アナツなるべし○ナ○ノ五音相通す

○阿漕塚ハ往還阿漕町より東の方。海濱に古墳あり。榎一株を植て世に是を阿漕明神といふ余伊勢の國人にたづねて阿漕の事をきくに阿漕塚より僅に二町余を隔て一塊の土饅頭あり。これを平次が舎弟の塚といふよし。按ずるにこれ又土人の訛する說ならし。彼阿漕塚ハ毎歳七月十六日盂蘭盆會に供養とて牡丹燈蓮華燈の類家毎に切紙燈籠を裝て彼處に携へ行き。塚の周圍に掛列て靈を祭る事のよし。文化當時に至れども絶ず此祭祀あり。最阿漕町に限るとぞ。

○因に云阿漕の謡曲ハあまねく人のしる所なり。狂言綺語といへども能く勸懲の意にかなへり。凡天地の間に人ほど貴き物なし。しかれども古より法ハ重し人ハ軽しとぞ。夫法ハ大小厚薄。其品かぎりなし。小法といへども其重き事泰山の如し。故に貴き人なりとも重き法にハ及ざる所なり。彼謡の意を考ふれ。法の重きことをしりながらも。夜深く竊に魚を捕るこより深夜のことなれバ人ハしらじとおもひしかども。惡事千里の習俗にて。竟にハ海底に沈められぬ。されバ度を過ると物をさして。阿漕なりといふ辭ハ是よりぞ始りける。貧富尊卑ハ天命の定まる所にして。人力の及ざる所なれバ。たとひ貧困餓死の場に臨むとも。小の法をも犯すべからず。彼小山田高家が軍法を守き青麥を刈し事ハ武勇の為に許さる所なれども。これを軌範として小法なりとも犯すものハ虎を畫きて猫に類するものなるべし。此謡曲を聴く人ハ小法なりとも犯ざれとの教示なり。云爾

考證畢

## 卍 棄恩入無為 卍

## 卍 真實報恩者 卍

黒蟒口中舌
黄蜂尾上鍼
千騎窟
海賊張本
巖窟大王
實名ハ
室平四郎
重廣
婆羅門黨の
使客ハ打扮
白波
雲平と
偽名ス
東海賊主
両般猶末毒
最毒狡人心

天竺之道人
變形妖術
自ら巖石に
隱して黑と
石面ハ現し
秘文と呪して
妖魔と
會ふ圖

○安達景盛近臣
鳴戸橘内若實
二八佳人體似酥
腰間伏釼斬愚夫
雖然不見人頭落
暗裏教君骨髓枯
一刀捨人と斬る一人當千は勇士
とゝへられ短慮切れなさ成

○大磯遊君
愛壽
三尺有影
誰能動
萬支無根
只自分
雪隱鷺鱔
飛始見
柳蔵鶯鶏
語方閑
○雲平妻沖津宛鬼

鈴鹿山賊隠れ形なき影の頼八元頼八一名鼻欠頼八後に頼八と呼ぶ

○橘内妹薗葉

濃霜偏打
無根草
災禍只掎
福薄人

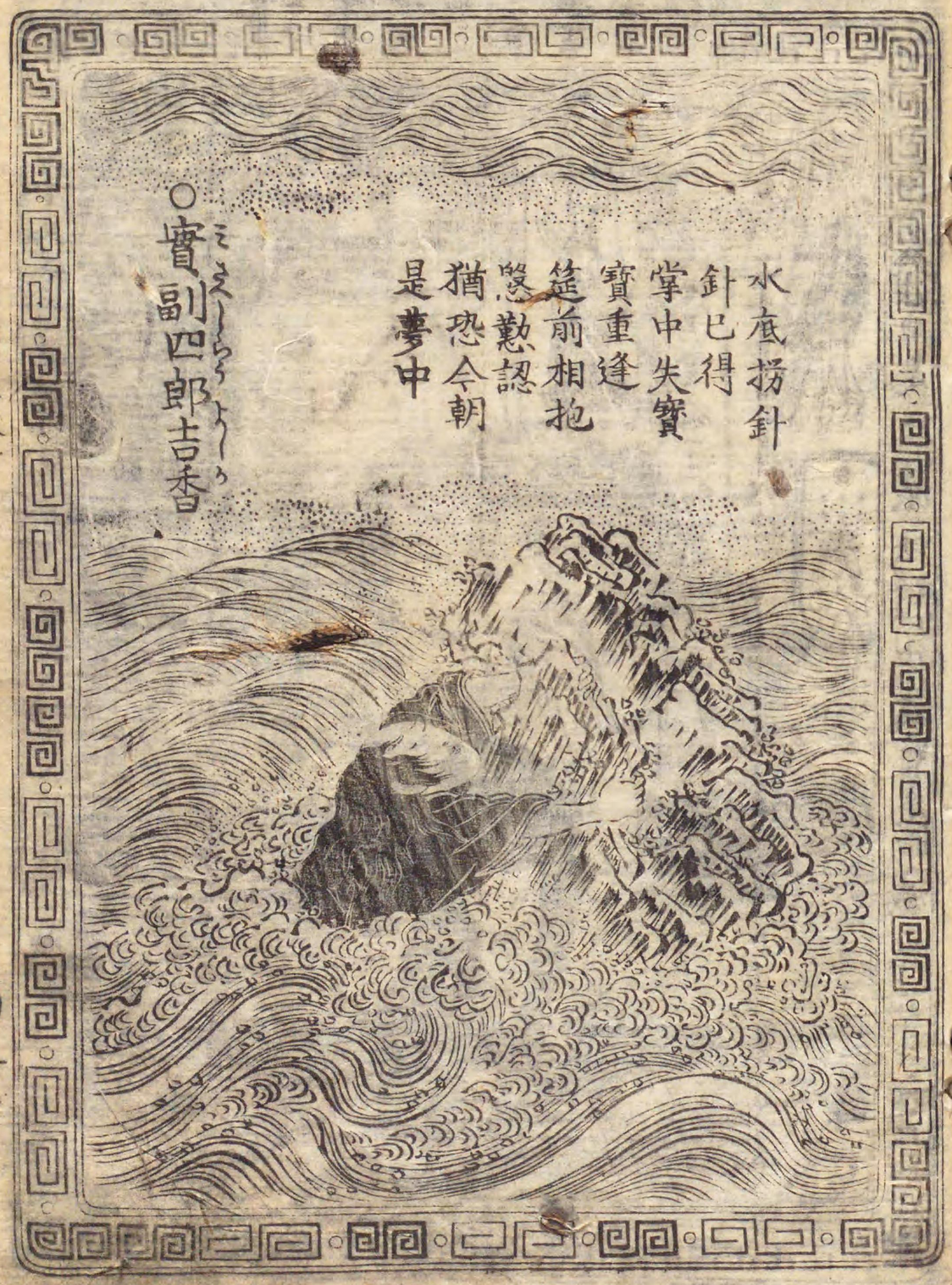
○雌雄蜂

○蠓蝵

○螺蠃

水底拐針
針已得
掌中失寶
寶重逢
筵前相抱
愍懃認
猶恐今朝
是夢中

○實副四郎吉香



三寸五分の
千枚
用
一日
無
書
子
休

佛○諸行無常
僧△生滅滅已
法○是生滅法
寶○寂滅爲樂

愚亡妻麻子
幽霊

○阿漕浦漁夫平二妻
○刈藻

○一子礒兒

伊勢乙女
ちはやふる
神の濱手
をくらしつゝ
いつかを何と
かひなあらんと

白頭波上
白頭翁
家逐船移
浦浦風
弐尺鱸魚
新釣得
兒孫吹火
施花中

漁人 阿漕平二次盛

# 阿古義物語標目

## 巻之一

益亭三友 校


開場 懐恨江嶋舟


## 巻之二

古今亭三鳥 校


第一齣 奪媚珠釀禍
第二齣 老狐操寃人
第三齣 蜂王綰赤繩
第四齣 曉危木像泪


## 巻之三

徳亭三孝 校


第五齣 奪釼隱形術
第六齣 抱忠廢愛子
第七齣 妬婦活墮獄
第八齣 登天成練術

○巻之四

第九齣 耶麿姫怪異

第十齣 蓋女姦袖師浦

第十一齣 責奸妾執蛇

第十二齣 惹黨無頭亂

通計十二齣 前帙標目尾

樂亭主笑枝

善惡報応
火戒作悪
福福自見
人間為善

流轉數回阿古義物語卷之一

一名 大磯千人きり

○開場

懐恨江嶋船

江戸 式亭三馬 著編

土御門院の御宇。正治元年正月廿六日宣下あるて。征夷大將軍從二位行左衛門督源朝臣頼家公。御父頼朝公の遺蹟と續ぎ。萬機の政務を執り天下の補佐しかつ此年わづらひ沙汰あるて太夫屬入道善信未亥と執しめ。問注所と郷外にて建られ。去る所の秋乃上旬三河國より腳力を以て訴へ。室平四郎重廣とつゝ者。強竊の賊徒許多を率ゐ。大に本國乃驛に陣しめいそぎ搦捕ふべきぞ八国中靜るべしとぞ告ける。是太ど易かゝぬ事なり。誰と使節をつかく重廣が横法を糺斬さべ紀と各位商議あるしが漸ゝ一決ちく安達弥九郎景盛ぶ定るあ此景盛往る春ゝ頃洛陽より一個の美女とまねきゝ彼が

美貌ゆ煩こそ昼夜傍を離得ず。仍く當般は使節を心裡喜ばぬこと無し。
三河国ハ父藤九郎入道蓮西が奉行する國なれば遣るべき方術あり。遂ゆを進發
ちうけ。さらに頼家公ハ日来好色人ゆまりくれば。彼景盛が妾は容色端麗と
いふこと風ゆ聴及でる。ゆえ戀にわくがまそ數回懸想文を贈ることを。更に
ちうけまゆ。もを拒ばもをべかりて烏恐ともこ。なひぬ。ちうゆ此度景盛が三河国に
赴さるを。俳徊の時ありとく。中野五郎能成ゆ命せて彼妾を密ゆ奪ひこしめ。
石壺ゆる北向御所といふ居置る。殊に寵愛深しとや。偖を景盛ハ三河
国ゆ馳向へ。士率ひ分散しく重廣が横行を呼くと捜ることを。重廣を討手
むとふと聞くも相摸国ゆ立越る。日南山の深谷ゆ匿れ居りるハ其踪跡をち
べくと。景盛手をむのく鎌倉に飯アてちうぐの由告しふ。羽林ゆその外
不興なるのこ。ちうに月花と愛ちを妾奪ちれ。景盛が心魂左思右想と悶辛こ。



讎をこそこそ日をおくりぬ。ちうゆ彼愛妾は京ゆよりく野心を宿こ公とらこそ奉ゆ
乃由。論者の古を寔と云ゆへ。羽林深く憤りて景盛を誅ちべき旨。議せられるハ。
軍勢甘縄乃家に押寄せ其騒動おりくとなる。尼御壷所ゆこと聴ゆへ。罪ゆさ
盛長父子を憐おりくと羽林をさゆぐと諫めひるハ。支ゆ多ゆく納ちるゆ。されば
景盛を尼公の恩恵を仰ぎく忠勤怠ることを任ちるゆ。愛妾ゆ離るそよりを心氣
ゆとくを悔ゆ。一頭ゆる景時が讒言と悪こ。一頭ゆハ能成が根籍を憤る。且
不興ゆ原を是。室平四郎重廣を擒ぐりくよりを。重廣が踪跡を
索めくこと日夜肝心をを碎きる。頃を正治二年九月乃中旬。江島辨財天ゆ
詣ぐやと。譜代の良從僅ゆ二三人を將く腰越より小舟に取乗る。やをて海上ゆ乘
出るゆ時くを風静ゆ浪和ゆる。後ハ。兼日の鬱散ちるゆあくとて舟より四面を眺ハ。
空ゆを一片の雲さへ。天氣快く晴られハ。佳境をくゆ興ゆまさるを。向上ハ芙蓉

峯霞にかくろひて高く向背ハ由比濱浪に添てまよひて長し遠く波上を眺むれバ運船數百艘往反漲る沢辟て走乃趙る如く近く海岸を望めバ家屋幾千軒尊卑甍を竝て龍の臥を不侶る山水に心を養ひ奇覌惧むに不足る唯見尽し足らぬものは遥乃山に翠を疊こ遠き水に青を積むの風情あるのミ程なく金亀山に到るにぞ舟を窟下にとゞめ龍女窟にいりて少刺拝しとりて歸路を海荘に促しく既に漕出さ所に忽然一艘乃樓船を視る主従是を見やるに荒くしき男十人ばかり各酒餚をまきちらして盃盤狼籍いとべくもあらぬ舷にたゞりて叫くと戯くわ丑い碇にかられて呵くと笑ふもあり山猿みだくに酔さるゝ船頭に上りて風をや慕ふらん海蟹のごとくに醒られぬ船尾に下りて水をや好むらん斯る擾攘なる中に舞妓とおぼしくて破瓜あまりなれ嬌艶ある少女が團坐に竝居る中央に坐せし光景恰ながらに芍藥の花

一輪咲出さらん風情あるにぞとさらぬだにうちつれバ彼少女を傍なる仕夫が膝にかゝらせて金箔あて泥されし舞扇手まさぐりて我こそ酬しといはぬばかりの面想して居たるが琵琶法師は琵琶搔鳴らして今様乃曲乙調に奏れバ酔心にうかれ立て志どろ柏子に舞ふ形相船中の人々興にいりてかの船も覆る計なる喊叫なりね夫が中にも魁首なる荒夫坐褥を旁に踏みだりていたく酔ぬさとみえて猩々の手巾に鼻斜て眼包みに垂かゝりてひだるく抹額しまきて掲手に盃をもちて太刀とれ舟を直下し鼻のあたりをとめつゝ居たり這は是誰ぞといふに先達て三河国を逃去りし室平四郎重廣といへる賊長なり彼が世を匿ぶ一名を白波雲平と呼びて市井に交りしも悪棍ともつて金銀を塵芥の如く蒔ちらしたるぞ當時徘徊せる俠客の徒まで悉く雲平が言を推いたのもしぶられ伏したれバ誰ありて重廣とあるものなかりけるとかくいふ附属の小賊どもなる不

安達景盛ハ
龍臣
鳴べ
橘内
榎嶋の
遊船ハ
勇と
躍して
侠客
婆羅
門黨の
猛威と
折く
騎士會

俠客といつつも婆羅門黨と呼ぐ。今日同船乃荒男い便ち波婆羅門黨乃悪棍あく。敵亀の泥太郎。雁飛治團太猿桃酉九郎。蟹眼波三太獅子乃覚兵衛おとのすこ傳平など。各異名と名告る中にも鼻柱頑八眼玉阿　武内の二人を視眼嗅鼻にてぐく雲平ぐ左右の手下の。此雲平容ゐ大礒乃章室ゐ通ひく。長が家なる名ゐ高き娼妓愛壽とゆくゐ深く馴染ゐるひゐ情意をるげこちね。さてを雲平も安達景盛とゐ露ぐるもるず且景盛も室平重廣といさら思ひ彼ぐ只傍若無人ゐる挙動傍痛ことぐるいて。空目して漕別ぶんとあるゐ船中よりと一個の大漢子。参差さゐ液涎ゐるぐ景盛ぐ舟なる船師乃面貌ゐあるれ吐ゐ。彼男詑もる氣色をゐく。却く冷笑くく入ゐ彼ぐ。水師ハ顯らくゐめて呟き居ゐぐ。やて艫と盪皈ゐ彼首乃船に乗りくゐ漕寄せ。やを是粕奴汝吾面ゐ液ゐく。るど一言の詑をもせぐるや。



吾賤ゐくく汝等ゐ液を掌る者ゐあるを頃ゐ三拜ゐく吾擯鼻禪とゐぐる。吾眼とゐぐるて陽物と掌ゐとゐくまぐゐ雑言ゐるれば。彼流男船倉より跳出。汝いくくも悪聲ゐけるよりぐく擯鼻と掌るべぐぐ船ゐ蹂躙ゐ。群くくゐ毛ゐ生ゐる腕と。揭手ゐ出ゐと見えるが。何乃苦ゐるく舟師と搖机。轉くくと掉轉ゐる勢ひ。重りゐ鐘楯とゐるりく嬰鬼抓ゐるゐと斯やぐぐ想ゐる。ゐやるく一震ゐく水中ゐ投入ゐ抓ゐば。今日乃遊興ゐゐるゐとゐ一坐笑ひ罵ゐる。此大漢子ハ則ち眼玉阿武内ゐと船ゐ立ゐる。景盛ゐ舟と斜ゐ見ゐく大音ゐよりゐる。你等吾儻と誰ゐ思ゐぐ虎狼と恐怖ゐる。婆羅門黨ゐ俠士。天竺浪人の開山忌。今日此船ゐ大會と設ゐる。信心の徒有縁无縁とえゐぐと目前施餓鬼ゐ施ぐ。御回向くと呼ゐぐ。船中同音ゐ南無提婆佛。南无提婆佛ゐ唱ゐ。舟長ゐ指揮ゐて浮く船と

漕去りしも彼水師ハ水中と游上りてそこの乃舟ゐ上りたるが。景盛主従の殺風景と憤り。無類の奴原いふかひなしと斷遠ちて居たりしゐ。良従の内一人色白く肥太りたる膚雪はだへ。顔色温潤乃壮夫。過刻より這始末と静かに視居たりしが。徐くと坐と立て衣服と髪ゐ解去り。景盛ゐ向ひ。相公ゐ刻待せゐ在下計ふべき旨あるといひさま。裸裎にあらて水中ゐとび入る。瀾〳〵る浪と替りて忽ち見えどなりぬ。人々いかと目枯とせでまもり居たり。彼首の樓船をまもりたるものとを見たる。同音ゐ笑罵る。目口ゐ指をさしいれく舌と出をあまたび。褌引揭くて尻ちゐ打たるもあり。汝等ゐ腰の立ざる弱其舟ハいたりと舟よりみど謗〳〵。僅ふ三段ばかり隔られば手ゐ挿ゐ刎えり。備も猛壮士ハ悉ち諧浪と搔分け。辛〳〵して樓船ゐ游到り。偏舵ゐ引つき音ぐらゐ出し。船中の動靜と窺ひ。舵と傳ふて船ゐ上ゐ。後倉ゐ





ゐ〳〵者共ゐ向ひて何曾者ぞと狼狽く立かゝる。鉄拳ちわゐて四面ゐ打倒し。即便中倉ゐとびくいたる。他の者ゐも目も中ぬ阿武内ゐ勝りぬとて飛慌り。戸ゐ〳〵搔抓ぶ逃れ水ゐ入ぬ。わいやと乃内ゐ己も續て海ゐ入て軀と翻して景盛が舟ゐ游着。身軀も唏とぶ船頭ゐ跋扈。大音ゐ〳〵夫なるゐ聞わるとゐ内ゐ今吾名告る曳と聽ゐ。そもく景ハ鎌倉殿恩顧の忠臣。安達弥九郎景盛が部下ゐ扨ゐく。萬夫不當乃剛兵と呼ばる。數度の戰場ゐ雷名と轟せり。鳴戸橘内芳實といふ者ゐ。婆羅門黨壮會場と妨ぬ。佛弟子と水ゐ投ても本尊罰ゐわるぶ。提婆の利益ちあるぶ高ゐゐゐ。猶身ゐ〳〵て居たりしが。白波雲平が方ゐ向ても提婆が敵の釈迦佛ゐ〳〵。鳴呼勇〳〵しい哉鳴戸橘内。ゐ〳〵ぶ。おそろしくして鳴ゐ居たりぬ。一刀とを佩ぶ樓船ゐ游到り。一人の敵と志ぶ益なき人と傷ぶ素水師が

22
11
42



水ゐ投らまつよ至ゑまぐ。又阿武内と水ゐ投じ。戈と回さどゝ〳〵く無古又ゝ憤を休〳〵ち天晴英傑ゐうとて感賞浅うゝご。程ゐく海荘ゐご皈ゝ。此橘内ハ大磯の娼門ゐ通ひ。ゐんの程ゆうう昊ゐ又愛壽ゐ心を蕩〳〵ぬさられバ雲平ゞ名ハ章室ゐく聴及びゝゞ。謁見う支ち今日初田ゐう。ゑうれゞを本名室平四郎ゐう支ちさゝゐゑゝず。且雲平ハ景盛と聴くのこゝゐゝゞ。兼く愛壽ゞ戀を競ふ橘内ゐ初く謁え且駭さ且慌く。心中地天と混乱〳〵ゝゞ。辛〳〵じて阿武内ゞ溺ゝ〳〵バ扶てゞゝ。當時ゐ至つゝて阿武内ゞ十二ハ刀ゐ酔。こちまち夢の寤ゝゝゝゞく。氷と吐き衣を更て舩倉に坐〳〵ゝゝゞ。只吾ゐをゐ〳〵ぬ良〳〵てゞ屈居〳〵れゝかゝ〳〵しゝゞ音止ゝ。嗚静ゝて更ゐ一言を吐く者ゞ。正ゐ是霹靂止で痕ゐ白日を視るゞ如く。一日乃興をむゐ〳〵一時ゐ竭ゝ。怱然〳〵〳〵皈路を促せゝ。是ゝ〳〵後。嗚戸橘内。白波雲平。倶ゐ愛壽ゞ色ゐ迷ひ。心中矣越ゞ

なゝて竟ゐハ身ゞ謬ゝま至る這箇一回ハ小説の發端なれど。看官眼をとゞめて微く讀のふべし。



轉數回阿古義物語巻之一終

門人 益亭三友校

122
11
42

# 森書館